

『異邦人』の形成過程に関する一考察

松本陽正

1

『異邦人』の形成過程については、1962年ブレイヤッド版の『紹介文』の中で、ロジェ・キーヨが『手帖』の記述を手掛かりにカミュ自身の証言に触れつつ論じたのが最初である¹⁾。ついで、1965年ピエール＝ジョルジュ・カステックスが、その著書の1章を割き²⁾、刊行直後の『手帖1』(1962)をもとに形成過程を詳細に辿ることとなる。それを受けて、1971年ベルナール・バンゴもまた、その著作の中でこの問題を取りあげた³⁾。カミュ研究者にしてブレイヤッド版の編者、現代フランス文学の泰斗、小説家にして批評家といった三人の文学者の精緻な分析によって、『手帖』をもとにした形成過程の後付け、執筆時期の推測については見解が出尽くした観があり、以後、形成過程が正面から論じられることはなかった。しかしながら、これら三つの研究はいずれも『手帖1』に依拠したものであり、バンゴの著作から30年近い歳月の経過した今日、我々は『手帖1』以外の資料を目にすることもできるようになっている。すなわち、ロットマンによる詳細な伝記(1978)、『カミュ＝グルニエ往復書簡』(1981)、とりわけ手紙をふんだんに盛り込んだトッドの浩瀚なカミュ伝(1996)といった書簡や研究成果がそれである。それらの資料を援用しつつ、『異邦人』の形成過程を再考するのが本稿の目的である。本稿では、可能な限り事実を跡付け、推測を回避するために、できうる限り直接的な証言や手紙を引用しつつ論を展開したい。そして日付の修正や確認にとどまらず、そこから派生する新たな問題についても言及したい。

2

考察に入る前に、問題としなくてはならないのは、『幸福な死』との関係であろう。『幸福な死』は『異邦人』とは「全く別の書物である」⁴⁾としても、『手帖』を辿れば、後に『異邦人』の中に盛り込まれることとなるさまざまなエピソードが、『幸福な死』執筆と並行してとられていることがわかるからである。それではたして、『異邦人』は『幸福な死』と同時並行的に執筆されたのだろうか。それとも『幸福な死』の執筆断念の後、というかむしろ推敲断念の後に書き始められたのだろうか。この問題を明らかにするために、まず『幸福な死』の推敲断念の時期を確定させておきたい。

『幸福な死』の第一稿ができたのは1938年2月初旬と考えられる⁵⁾。おそらくは少し手を加えた後、クリスチャーヌ・ガランドーにタイプを依頼し、カミュは恩師ジャン・グルニエに送付することとなる。グルニエからの返事の手紙は焼却されており、その文言を知る由もないが、批判的な文面だったことは間違いない。6月18日付のカミュがグルニエに宛てた手紙からは、グルニエの批判を受けたカミュの心の動揺が読みとれる。ここには『幸福な死』の失敗の自覚とともに、ものを書くことへの自信の揺らぎといったものがみとれる⁶⁾。

この6月、『手帖』には「夏の予定」として7つの項目が列挙されているくだりがあるが、その6番目には「小説を書き直すこと」(C1, 112)⁷⁾とある。『手帖』のこのメモには正確な日付が打たれておらず、それ故、このメモがグルニエからの手紙より先にとられたものか、それとも後にとられたものか、つまり、グルニエの批判⁸⁾を受けて認められたものか、それとも自己の批評眼によるものか、その特定には困難さがつきまとう。しかしながら、いずれにしても、この小説が『幸福な死』を指すことは間違いない⁹⁾。

事実、「夏の予定」の前後には「書き直す」べき小説のためのメモがいくつかみつかる(C1, p.111, pp.111-112, p.113, p.116参照)。だが、それ以後は、1938年の秋と推定される時期まで、『幸福な死』のための具体的なエスキス

は現れない¹⁰。後に「異邦人」で用いられることとなるレイモン・サンテスに関する覚書と埋葬の場面の覚書にはさまれるかたちで出てくるこのエスキスが、「幸福な死」のための最後のメモと考えられる（*CL*, pp.123-124参照¹¹）。ところで、これらのメモのどれ一つとして、今日我々が目にしている「幸福な死」の決定稿に盛り込まれてはいない点はきわめて重要であろう¹²。それ故、現存する「幸福な死」に活かされなかったメモが最後に記されている1938年の秋、もしくは冬に、カミュは「幸福な死」の推敲を断念したと考えることができよう。いずれにしても、1938年に断念されたことは間違いあるまい¹³。

実際、1938年夏以降、カミュは、「幸福な死」の手直しよりもむしろ、初期作品群の総決算を図るかのようになり、「結婚」の完成を目指すこととなる。そして、1938年末、グルニエに意見を求めるのは、もはや「幸福な死」ではなく「結婚」である¹⁴。

と同時に、1938年秋以降には、すでに指摘したように、「幸福な死」のために活かされなかったメモとは裏腹に、後に「異邦人」の中に盛り込まれるエピソードが「手帖」に散見されることとなる。そのことはカミュの関心が「幸福な死」から新たな小説の方に向かっていることをよく示している。だが、「幸福な死」推敲断念が1938年秋か冬だとすれば、この時にはまだ、「異邦人」執筆にまでには至ってはいまい。詳しくは後で辿るが、1938年11月末にならなければ、一人称の語りと複合過去の使用の記述例は「手帖」に現れてはこないからである。「異邦人」執筆は、あくまでも「幸福な死」断念の後なされている。

3

それでは、「手帖」には「異邦人」に関してどのようなメモが認められていたのだろうか。もう一度部分的に整理しておこう。

カミュ自身がロジェ・キーヨに打ち明けたところでは、「異邦人」のテーマの意識的な形成は1937年8月にまで遡る。

Un homme qui a cherché la vie là où on la met ordinairement (mariage, situation, etc.) et qui s'aperçoit d'un coup, en lisant un catalogue de mode, combien il a été étranger à sa vie (la vie telle qu'elle est considérée dans les catalogues de mode).

I^{re} Partie — Sa vie jusque-là.

II^e Partie — Le jeu.

III^e Partie — L'abandon des compromis et la vérité dans la nature.

(CI, 61-62)

『異邦人』の「出発点」¹⁵⁾がこの記述だとしても、しかしながら、この記述は具体的な作品構想がこの時に得られていたことを告げるものではない。上の引用にある作品の構成が『異邦人』の構成とはまったくかけ離れたものとなっていることがなよりの証拠となろう。『手帖』には、後に『異邦人』に盛り込まれることとなるエピソードが記されているが、問題は、『手帖』に認められたさまざまなエピソードがこのテーマにそって効果的に配置され、有機的に結びつき、カミュが『異邦人』という作品の具体的構想を得、それを書き始めた時期であろう。

ところで、『手帖』を見ると、二義的な作中人物のエピソードとともに、後に『異邦人』の骨子となる二つの主要なエピソードが繰り返して記されているのに気付く。一つは冒頭の第一章、通夜・埋葬の場面に関するものである。この覚書は実体験を下敷きにしている。カステックスによれば、1938年5月、兄リュシアン¹⁶⁾の妻の祖母がマランゴの養老院で死に、カミュは納棺・埋葬に立ち会っている¹⁶⁾。そこでの見聞はすぐさま『手帖』に書き留められる(CI, pp.110-111参照)。しかし、それにとどまらず、その後二度にわたって、通夜・埋葬の場面の覚書がとられることとなる。1938年11月末の三度目の覚書は、後に冒頭部として使われることになるものほとんど変わらぬものとなってくる。

2P.

Aujourd'hui, maman est morte. Ou peut-être hier, je ne sais pas. J'ai reçu un télégramme de l'asile. (Mère décédée. Enterrement demain. Sentiments distingués.) Ça ne veut rien dire. C'est peut-être hier... (C1, 129)

よく言われるように、一人称の語りで複合過去の使用されたこの覚書には『幸福な死』との決定的な違いがあり、この時点でカミュが将来『異邦人』となる作品の文体を発見したことは間違いない。ただ、問題は「2P」という言葉が添えられている点である。大久保敏彦氏も指摘するように、おそらくこれは、第二部を指すものであろう¹⁷⁾。それ故、この時期、今あげた引用文が冒頭部として定まっていたとは断じ切れない。つまり、『異邦人』の全体構成はまだ整ってはいなかったと考えるべきであろう。

『手帖』に繰り返し述べられている今一つのは、カミュの強迫観念ともいえる死刑囚のテーマである¹⁸⁾。1936年初めに出てくる死刑囚に関するメモは、当初は『幸福な死』のために書き留められたものである(C1, pp.24-25, p.26参照)。1937年6月には、司祭の訪問を毎日受ける死刑囚に関する断章が出てくる(C1, pp.49-50参照)。そして、1938年12月になると、死刑をめぐる省察とともに小説の結末部の長いエスキスが現れてくる。「完」という言葉で結ばれている最終パラグラフをみてみよう。

... Et ce ciel sans étoiles, ces fenêtres sans lumières, et cette rue grouillante et cet homme au premier rang, et le pied de cet homme qui...

FIN

(C1, 143-144)

これは『異邦人』の結末部とはまったく異なるものだ。ただ、注目すべきは、結末部に関するこの長い覚書の中で、三人称の語りになっているのは、

この箇所だけだという点である。つまり、他の箇所は、一人称の語りをとっているのである¹⁹⁾。しかも、現在形の使用例も見受けられるものの、例えば《J'ai fini par ne plus dormir qu'un peu dans la journée [...]》(CI, 142)といったように、複合過去が使用されている点には注目する必要があるであろう²⁰⁾。すなわち、これは先にあげた、後に『異邦人』の冒頭部となる1938年11月の記述との文体上の一致を告げるものなのである。したがって、1938年12月以降、比較的早い時期に冒頭部と結末部が繋がったとの推測が成り立つ。母親の通夜・埋葬に出た一人の男が最終的に死刑に処せられる物語をカミュが着想する瞬間に近い。

以上のことから、仕事のプランを記した1938年末の『手帖』にある、「カリギュラ」と並列された「メルソー」はこの段階では間違いなく『異邦人』を指していると考えられよう(CI, p.144参照)。そして、翌1939年1月には次のような記述がある。

Ordre du travail :

Conférence sur théâtre.

Absurde en lecture.

Caligula.

Mersault.

[...]

(CI, 145)

この記述は、〈不条理三部作〉の構想成立を告げるものに他ならない。そして、若き日のカミュが主人公の死によって不条理を提示しようとしていたことを想起するなら²¹⁾、このメモは、今しがたあげた死刑囚の断章の小説化の構想が得られたことを物語っている。すなわち、つい1ヶ月ほど前に認めた通夜・埋葬の場面の断章と死刑囚の断章との結びつきがなされたことをこの覚書は示しているといえよう。

4

それでは、いつ書き始められたのか。

1939年2月2日、ジャン・グルニエに宛てた手紙で、カミュは『結婚』に関する助言に対し礼を述べた後、〈不条理〉のテーマを意識化し、三部作に着手したことを打ち明けている。すなわち、「〈不条理〉に関するエッセーに取り組んでいる」こと、「この〔＝〈不条理〉の〕テーマに新たな小説を結びつけ、これもすでに書き始めた」こと、「カリギュラに関する戯曲はもう随分前から書き始めていること」を告げている²²⁾。とはいえ、『異邦人』の筆は進みはしない。1939年7月19日の手紙では「しかし今はまず『カリギュラ』を片づけてしまいます²³⁾と『カリギュラ』完成を優先させている。なぜ、『異邦人』は進まなかったのだろうか。

『異邦人』という小説のストーリーを手短かに要約すれば、母を亡くした一人の平凡なサラリーマンがふとしたいきがかりから「太陽のせい」(I, 1198)でアラブ人を殺してしまうが、彼はその犯罪によってというよりは、母の通夜・埋葬の日に涙を見せなかった廉で社会から断罪されてしまう、ということになる。アラブ人殺害が、埋葬と処刑を繋げているし、軸となっているのである。

ところで、『手帖』には、一人称の語りの発見、複合過去の使用の他に、埋葬の場面と最終章に関する長い記述が認められていたが、この二つを繋ぐ殺人の場面の記述、そしてそこから必然的に派生する予審・裁判に関する記述はまったく記されてはいなかった。それはなぜか。その謎が、手紙や証言をもとに綴られたトッドの浩瀚な伝記によって明らかになったのである。

ピエール・ガランドーの友人がアラブ人と浜辺で喧嘩した事実があったことは、ロットマンがすでに短く言及してはいた。ロットマンによれば、アラブ人の短刀で口を怪我したガランドーの友人は「ガランドーを呼びに別荘に戻り、ピストルを手にし」、「二人はアラブ人を追って浜辺に引き返した。二人はそこでアラブ人を見つけたが、発砲ぎたにはならず終わったようだ²⁴⁾、

とのことであった。しかしながら、この「事件」がはたしていつ起ったのかは正確に記されてはいなかった。ところで、トッドはこの件について貴重な証言を収集することに成功し、その経緯を詳細に報告することとなる。以下、トッドの記述を要約しておこう。

おそらくは「1939年夏」²⁵⁾「日曜日の朝、11時と12時の間に」²⁶⁾、ピエール・ガランドーの仲間ラウル・パンスサンがオランの浜辺で二人のアラブ人といざこざを引き起こす。弟の通称ルルーを連れ、引き返したラウルと二人のアラブ人が、一対一の殴りあいになる。ルルーは指示されていた相手を打ちのめす。ラウルも相手のアラブ人を倒し、締めあげようとする。その時、遠くから見ていたガランドーが叫ぶ。「気をつけろ、奴は短刀を持ってるぞ！」だが、すでにラウルは口の端と腕を切られている。医師の治療を受けた後も、怒りのおさまらぬラウルは、ピストルを持って、アラブ人を探しに別荘から浜辺に降りていく。ガランドーがついていく。ガランドーはラウルからピストルを取りあげる。ガランドーはラウルに、アラブ人と遇ったら一対一で戦うよう諭し、さらに続けて、もしアラブ人が短刀を抜いたり、またもしアラブ人たちの数が多かったりしたら、俺がピストルで脅してやると言う。岩陰に二人のアラブ人がいた。一人はライタ (raïta) を吹いている。しかし、アラブ人たちが逃げだし、発砲ざたにはいたらずにすむ²⁷⁾。

『異邦人』第一部第6章の浜辺の散歩の場面と酷似したこの「事件」を耳にしたことが決定的な触媒となり、『手帖』に認められていたさまざまなエピソードの結びつきが一挙に可能となったと考えられよう。カステックスのいう「回転軸」(pivot)²⁸⁾となる章が定まった今、それまで認められていたエピソードが結晶し、『異邦人』のプロットが仕上がることとなるのである。カミュは後に「三人の人物が『異邦人』の構成に加わっている。二人の男（そのうち一人は僕だ）と一人の女」(C2, 34)と打ち明けているが、この点からも「男」がピエール・ガランドーを指すことは間違いあるまい²⁹⁾。

だが、「事件」が起きたのが1939年夏としても、カミュがこの話を聞いたのは一体いつなのだろうか。

1939年10月7日のフランシーヌ・フォール宛の手紙には、「君に言っていたように（また僕自身に言いかせてたように）、僕はまず始めに小説を書くつもりだったが、実際に着手したのは〈不条理〉についてのエッセーの方だった。それに、エッセーの方が小説よりも僕の内部ではるかに成熟しているんだ。」³⁰⁾とある。さらに、11月26日付の手紙と12月3日付の手紙では、カミュはフランシーヌに『シーシュポスの神話』執筆の困難さを打ち明けることになる³¹⁾。カミュがこの時期、集中的に取り組んでいたのは『シーシュポスの神話』である。したがって、「事件」を耳にするのはおそらくこれ以後のことであろう。

1940年1月9日「ソワール＝レピュブリカン」紙が発行停止になり、失業状態となったカミュはその後二ヶ月余、主としてオランで生活する。したがって、1939年12月かあるいは1940年初めのこのオラン滞在時にカミュは「事件」を耳にしたのではなかろうか。また、ロットマンも言うように、これが『異邦人』の第一の翼だとすれば、「これで『異邦人』の二番目の翼ができた」とカミュが打ち明けた、母親の埋葬のあと恋人と映画を見に行っただというソワール・ガリエロの話をも、ルイ・ブヌスティと一緒に聞いたのも、この時期、オランにおいてではないだろうか³²⁾。いずれにしても、これら二つの話を聞いた後でないと、少なくとも第一部第2章以降は書けはしない。先にあげた1939年2月2日付グルニエ宛の書簡には、小説を書き始めたことだったが、もし仮に『異邦人』に着手していたとしても、書き上げることのできる部分は現在我々が眼にする『異邦人』の第一部第1章だけだ、ということになる。

5

1940年3月14日、カミュはパスカル・ピアの招きに応じ、オランを立ち、16日にパリに着き、ラヴィニャン通り16番地ホテル・ポワリエに投宿する³³⁾。愛する土地、愛する人々から遠ざかり、パリでカミュは自己を「異邦人」と意識することになる（CI, pp.201-202, p.202参照）。『異邦人』執筆に相応しい状況に身を置いたのだ。しかも「パリ＝ソワール」紙の仕事は、「一日5時間」

しかも「ただの一行も書くことはない」³⁴⁾。「望みうる最良の仕事」³⁵⁾ についたカミュは『異邦人』執筆に集中的に取り組むことが可能となる。1940年3月中旬、『異邦人』第一部第6章で使われることになる「ツルヴィル」の情景の覚書が『手帖』に現れてくる(C1, p.202参照)³⁶⁾。これが『異邦人』で活かされることになる最後のメモだ。ところで、カミュはほとんどの場合、執筆中はメモはとらなかったのではなかったか。つまり、『手帖』にメモのない時期は集中的な執筆時期と一致しているといえる。短期間に集中的に執筆された『転落』のメモが『手帖』にほとんど見受けられないのはその好例であろう。

3月23日、カミュはフランシーヌ・フォール宛に手紙を書き、『幸福な死』の第2章の原稿を「ラヴィニヤン通り」に送るよう依頼する³⁷⁾。そして、退屈な日曜日の情景とエマニュエルと疾走してくるトラックに飛び乗る場面とを、人称と時制を変え、ほとんどそのままの形で『異邦人』の第一部第2章と第3章とに盛り込むこととなる。

4月になっても精力的に取り組む姿勢に変わりはない。招待も「5回に1回しか受け入れず」、「かつてなかったほど仕事に打ち込む」³⁸⁾ のである。5月1日³⁹⁾、ついに『異邦人』を完成させる。脱稿の夜に認めたフランシーヌ・フォール宛の手紙からは、いかに全身全霊を傾注し創作に打ち込んだかがよく伝わってくる⁴⁰⁾。

とはいえ、パリで脱稿をみた『異邦人』は、あくまでも最初の草稿にすぎない点に注意する必要がある。『異邦人』の原稿をパスカル・ピアとジャン・グルニエにカミュが送るのは、これからさらに11ヶ月も先のことなのである。その間、カミュが『シーシュポスの神話』の執筆ばかりでなく、『異邦人』の推敲に多くの時間を割いたであろうことは想像に難くない。

『異邦人』と『カリギュラ』の原稿をピアが受け取ったのは1941年4月10日、グルニエがカミュに返事を書くのは4月19日である⁴¹⁾。おそらくは、同時にこの二人に送付したのだろう。だが、奔走するのはピアの方だ。ピアは原稿をマルローに送り、ジャン・ポーラン等にも働きかける。そればかりか、マ

ルローの批評をピアは書き写し、1941年5月27日付の手紙でカミュに知らせている。常に敬愛してやまなかったマルローからの親切な助言が書き写されたピアからの厚意あふれる手紙に触れたカミュは、1941年6月2日、ピアに次のように打ち明けることとなる。

[...] le premier chapitre a été écrit *un an* avant les autres, rédigés à Paris.⁴²⁾

今までの推論とも一致するこの文面は、『異邦人』執筆の真相を打ち明ける決定的証言といえよう⁴³⁾。

ところで、マルローの助言は「司祭との場面」の手直しと「殺人の場面」で「太陽とアラブ人の短刀との関係について（もう一パラグラフ）」ふくらませるように、というものだった⁴⁴⁾。この助言に忠実にカミュは再度推敲する。1941年11月15日、カミュはマルローに「二つの章を書き直しました。そうしてよかったと思っています」⁴⁵⁾と書き送ることとなる。

「一冊の本を書くのに三年、それを笑い物にするのに五行」(C2, 32)とは有名な言葉だ。従来、『手帖』の記述から『異邦人』完成は「1940年5月」が定説とされ、そしてそこから遡って執筆開始時期がいろいろと取沙汰されてきた。だが、はたしてそうなのだろうか。1940年5月に出来あがったのは、あくまでも最初の草稿にすぎなかったのではなかったか。上にあげたマルローへの返事からも窺えるように、その後、およそ一年半の手直しの期間が実際にあったのである。したがって、「一冊の本を書くのに三年」と書き記した時のカミュの脳裏にあった『異邦人』完成の日付は、1941年11月ととらえるべきであろう。

では、いつから書き始めたのか。「三年」というカミュの言葉を信じ、遡って考えてみよう。もちろん、「三年」はあくまでもおよその目安と考えてよからう。すると、出発点としては、1938年11月末の冒頭の場面のエスキスとか、1938年末の「カリギュラ」と並列された「メルソー」の記述とか、あるいは1939年初めの〈不条理三部作〉のプランなどが浮かんでくる。いずれに

しても、1939年前後に冒頭部が書き始められたということになりはしないだろうか。事実、1939年2月2日に、不条理に関する小説を書き始めたとグルニエに知らせていたのであった。そして、アルジェリアで第一部第1章を書きあげ、1940年5月パリで最初の草稿を脱稿し、1941年11月に完成させたということになるのではないだろうか。

6

カミュは『手帖』に次のように自己分析している。

Ce qui me gêne dans l'exercice de la pensée ou la discipline nécessaire à l'œuvre, c'est l'imagination. J'ai une imagination déréglée, sans mesure, un peu monstrueuse. Difficile de savoir le rôle énorme qu'elle a joué dans ma vie. Et pourtant je ne me suis aperçu de cette particularité personnelle qu'à l'âge de trente ans. (C2, 77-78)

だが、はたしてそれほどまでに想像力が豊かだったのだろうか。

それによって別に過小評価するわけではないが、カミュは、純粋な想像力によって作品を生み出すのではなく、作品創造に際しては、何らかの下敷きとなる素材を必要とした作家だったといえるだろう。不条理の系列の他の作品をみても、『カリギュラ』はスエトニウスの『ローマ皇帝伝』を源泉としているし、『誤解』の源には1935年にユーゴスラビアで起こった事件があったことはよく知られている⁴⁶⁾。すでにみたように、『異邦人』の中の、通夜・埋葬の情景、母の埋葬のあとのマリーとの映画、浜辺でのアラブ人との喧嘩といったエピソードは、実体験や見聞をもとにしたものであった。その他にも、実生活から得た二義的なエピソードや町中で小耳にはさんだカガユーが作品の中にはちりばめられている。また、主人公ムルソーの住む下町は、カミュが育ったベルクールをモデルとしたものであるし、カミュも一時期、船荷証券会社で働いた経験がある。海の見える牢獄も、カミュの通ったリセを

少しあがった小高い丘の中腹にある牢獄がやはりモデルになっているのだろう。裁判についても、ジャーナリストとして重罪裁判所で立ち会った多くの裁判がその下敷きとなっている⁴⁷⁾。さらには「社長」にすらモデルがいたとの指摘もある⁴⁸⁾。

だが、このような断片的な素材を想像力によって有機的に結合させ、芸術作品を創造しえたところにカミュの類稀なる才がある。『異邦人』の形成過程は、長年あたためてきた素材の短時日での結晶の軌跡ばかりでなく、一つの名作を造りだすまでの作家の推敲の軌跡をも如実に示しているのである。

最後に、第一部第1章を除く『異邦人』の残りの部分の草稿が、わずか一ヶ月半で書かれた点に触れておきたい。カミュは推敲に推敲を重ねる作家だとはよく言われていたし、娘フランシーヌの証言によれば、「カミュは少なくとも6回、原稿を書き直した」⁴⁹⁾という。だが、草稿段階での執筆速度はかなり速かったといえよう。

作家の執筆速度については、フロベールの執筆速度に関する木之下忠敬氏の優れた研究論文があるが⁵⁰⁾、カミュの場合には問題とされることはなかった。カミュの速筆ぶりは、『転落』の形成過程を探っても検証できるだろうが、この事実はそれなりに意味をもってくるのではないだろうか。というのも、我々は、遺稿『最初の人間』について、第1章を除く残りの部分は1959年冬にルールマランで短期間に集中的に執筆されたとの仮説をたてたが⁵¹⁾、『異邦人』の第一稿の執筆速度は、この仮説を裏付ける根拠の一つとなりうるからである。

余談ながら、『異邦人』の第一稿と遺稿『最初の人間』には、第1章だけ先に書かれ、後は短期間に一気に呵成に書かれたという奇妙な共通点のあることも指摘しておきたい。

注

アルベール・カミュの以下の作品を次のように略記し、ページは括弧内に直接

示す。

I : Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1967.

MH : Albert Camus, *La Mort heureuse*, Gallimard, 《Cahiers Albert Camus 1》, 1971.

C1 : Albert Camus, *Carnets : mai 1935-février 1942*, Gallimard, 1971.

C2 : Albert Camus, *Carnets : janvier 1942-mars 1951*, Gallimard, 1964.

- 1) Roger Quilliot, *Présentation dans I*, pp.1912-1919参照。
- 2) Pierre-Georges Castex, *Albert Camus et 《L'Etranger》*, José Corti, 1965, pp.15-26参照。
- 3) Bernard Pingaud, *L'Etranger de Camus*, Hachette, 1973, pp.3-6参照。
- 4) Roger Quilliot, *I*, p.1914.
- 5) 1938年2月10日付のフランシーヌ・フォール宛の手紙には、次のような証言がある。《J'ai travaillé sans arrêt et écris (je puis vous en parler n'est-ce pas?) tout un roman que j'ai terminé depuis peu.》(Olivier Todd, *Albert Camus une vie*, Gallimard, 1996, p.167.)
- 6) *Albert Camus - Jean Grenier Correspondance*, Gallimard, 1981, p.29参照。なお、邦訳は、大久保敏彦訳『カミュ＝グルニエ往復書簡』、国文社、1987を参照させていただいた。
- 7) 『手帖』の邦訳については、大久保敏彦訳『カミュの手帖』、新潮社、1992を参照させていただいた。
- 8) 『幸福な死』に批判的だったのは、グルニエばかりではないようだ。《[...] si ses amis admirèrent le manuscrit, lui-même n'éprouvait pas assez d'assurance, face aux avis contraires des hommes qu'il s'était choisis pour maîtres, pour chercher à le faire publier.》(Herbert R.Lottman, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne Véron, Seuil, 1978, p.201.) ジャック・ウルゴンからも「モンテルランの垂流のようだ」との批判を受けている (*Ibid.*, p.187参照)。なお、邦訳は、大久保敏彦・石崎晴己訳『アルベール・カミュ』、清水弘文堂、1982を参照させていただいた。
- 9) ロジェ・キーヨは《Il s'agit sans doute de *la Mort heureuse* qu'il avait renoncé à publier.》(Roger Quilliot, *I*, p.1915.)と指摘していたし、大久保敏彦氏も『手帖』の「訳注」で「『幸福な死』のことと思われる」(大久保敏彦訳『カミュの手帖』、

p.77.)と述べられている。

- 10) 1938年8月と推定される『手帖』には、「意識的な死について。ニーチェを参照すること」(C1, 119)との記述の後、「偶像の黄昏」が引用されているが、これも『幸福な死』の第二部を念頭においたものだろう。
- 11) ロジェ・キーヨは、1939年3月のメモも『幸福な死』のための断章であるとしているが(C1, pp.123-124参照)、その解釈には疑問が残る。というのもこのメモは一人称でしかも複合過去で書かれているからであり、三人称の語りで単純過去をベースにしている『幸福な死』のための断章とは考え難いからである。
- 12) C1, p.113, p.116, pp.123-124のメモについては、大久保敏彦氏も「この覚書は決定稿では使われていない」と指摘している。大久保敏彦訳『カミュの手帖』, p.77, p.79, p.84参照。
- 13) ジャン・サロッキは、『手帖』にある「『幸福な死』のための最後のエスキスは1938年」としたうえで、次のように指摘していた。〈Ainsi *La Mort heureuse* a été conçue et composée de 1936 à 1938.〉(Jean Sarocchi, *Genèse de «La Mort heureuse»* dans *MH*, p.8.
- 14) *Albert Camus - Jean Grenier Correspondance*, pp.32-33参照。
- 15) Roger Quilliot, *I*, p.1915.
- 16) Pierre-Georges Castex, *op. cit.*, p.19参照。
- 17) 大久保敏彦訳『カミュの手帖』, p.87参照。
- 18) 死刑がカミュの強迫観念になっていたことについては、拙論『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme* 研究』、駿河台出版社、1999, pp.170-175を参照されたい。
- 19) 括弧に入れられている、息子を処刑された母の嘆きの言葉は除く。C1, p.142参照。
- 20) この部分は〈dans la journée〉を〈dans mes journées〉に変えただけで、『異邦人』ではほぼそのまま使われることとなる。*I*, p.1205参照。
- 21) 『アストゥリアスの反乱』への序文でカミュは次のように述べていた。〈Il suffit d'ailleurs que cette action conduise à la mort, comme c'est le cas ici, pour qu'elle touche à une certaine forme de grandeur qui est particulière aux hommes : l'absurdité.〉(*I*, 399)
- 22) *Albert Camus - Jean Grenier Correspondance*, p.34.
- 23) *Ibid.*, p.35. 1939年7月、カミュが集中的に取り組んでいるのは『カリギュラ』であることが、7月27日付のクリスチヤヌ・ガランドー宛の書簡からも窺え

- る。*Ibid.*, p.246参照。事実、「『カリギュラ』は大いに捲り」、8月には脱稿することとなる。*Ibid.*, p.37参照。
- 24) Herbert R.Lottman, *op. cit.*, p.224. また、同書, p.200も参照。
- 25) Olivier Todd, *op. cit.*, p.790.
- 26) ムルソーたちが浜辺に散歩にでるのも、11時半頃である。(I, p.1163参照)
- 27) Olivier Todd, *op. cit.*, pp.230-232参照。
- 28) Pierre-Georges Castex, *op. cit.*, p.103.
- 29) この男女は、ピエール・ガランドーとクリスチヤヌ・ガランドーを指すとカステックスは指摘していた(*Ibid.*, p.29参照)。ちなみに、トッドは女性のモデルはイヴォンヌ・デュカイヤールだとしている。(Olivier Todd, *op. cit.*, p.312参照。)
- 30) Olivier Todd, *op. cit.*, p.208.
- 31) *Ibid.*, pp.215-216参照。
- 32) Herbert R.Lottman, *op. cit.*, p.224参照。「1941年12月、オランダ」とするブニステイの証言は、ロットマンも言うように、年については明らかに間違っている。だが、場所はもちろんだが、案外、季節に関する記憶も誤ってはいないのではないだろうか。
- 33) *Ibid.*, p.237ならびにOlivier Todd, *op. cit.*, p.236参照。
- 34) Olivier Todd, *op. cit.*, p.237.
- 35) *Albert Camus - Jean Grenier Correspondance*, p.39.
- 36) カステックスの指摘がある。Pierre-Georges Castex, *op. cit.*, p.25参照。
- 37) Olivier Todd, *op. cit.*, p.238参照。
- 38) *Ibid.*, p.246. 4月18日付、フランシーヌ宛の手紙。
- 39) 『手帖』には「5月」としか記されてはいなかった。CI, p.215参照。
- 40) Olivier Todd, *op. cit.*, pp.246-248参照。
- 41) *Ibid.*, p.276.
- 42) *Ibid.*, p.280.
- 43) 日付は不明だが、カミュがまだホテル・ボワリエに投宿していた頃、リセ時代からの友人であるクロード・ド・フレマンヴィルに送った手紙に、「君に読んでもらった第1章」という言葉がある。この手紙も、第一部第1章はアルジェリアですでに書かれていた証拠となるものである。*Ibid.*, p.241参照。
- 44) *Ibid.*, p.279. ピアも同意見だが、ただピアが直接カミュに指摘するのは、「司祭の場面」だけである。*Ibid.*, p.280参照。

- 45) *Ibid.*, p.282. また、推敲の跡については、プレイヤッド版の*Notes et Variantes*を参照されたい。
- 46) 「誤解」の形成過程については、拙稿「『誤解』の生成過程 —— 二つのく新聞記事」との比較を通して——、「フランス文学研究9」、広島大学フランス文学研究会、1990, pp.18-36を参照されたい。
- 47) *Albert Camus - Jean Grenier Correspondance*, p.53参照。
- 48) André Abbou, *Le patron de Meursault et son modèle*, in *Albert Camus 3 sur La Chute*, Textes réunis par Brian T.Fitch, La Revue des lettres modernes, 1970, p.173参照。
- 49) Catherine Camus, 〈Je ne me sens aucun droit sur l'œuvre de mon père〉, *L'Événement du jeudi*, 7 au 13 avril 1994, p.96.
- 50) 木之下忠敬「フロベール論考2『野越え浜越え』—— 自筆原稿と筆写原稿の諸問題」、岡山大学文学部研究叢書11」、1994.
- 51) 拙論「アルベール・カミュの遺稿*Le Premier Homme*研究」、pp.27-36を参照されたい。

Réflexion sur le processus d'élaboration de *L'Etranger*

Yosei MATSUMOTO

Afin de comprendre la genèse de *L'Etranger*, R.Quilliot, P.-G.Castex et B.Pingaud ont déjà analysé les notations des *Carnets* (1962) et ont formulé une hypothèse convaincante. Cependant la publication de nouveaux documents nous permet de donner un point de vue plus objectif sur ce problème.

Après avoir renoncé à *La Mort heureuse* en 1938, Camus a eu l'intention d'écrire un roman sur l'absurde. Mais il a peut-être éprouvé de la difficulté à écrire. En effet, c'est en août 1939, sur la plage d'Oran, qu'a eu lieu la bagarre qui sera la source du 6^e chapitre, «pivot» de *L'Etranger*. Le projet commence enfin à prendre forme. Camus a écrit le premier chapitre en Algérie en 1939, mais c'est en 1940 qu'en concentrant toutes ses forces pendant un mois et demi, il a réussi à rédiger le reste du roman à Paris. Pourtant il s'agit ici d'un premier jet que Camus s'efforcera de corriger tout en rédigeant *Le Mythe de Sisyphe* : après 11 mois de correction, il décide enfin en 1941 d'envoyer les manuscrits à Pascal Pia et à Jean Grenier. Et sur le conseil d'André Malraux qui a reçu le manuscrit par l'intermédiaire de Pia, Camus le retravaille pour la dernière fois.

Le processus d'élaboration de *L'Etranger* nous montre bien le travail d'imagination et de création d'un écrivain, fondé sur l'utilisation d'éléments recueillis dans la vie quotidienne, ainsi que sur la rapidité de l'écriture et une élaboration minutieuse et artistique.